

学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの研究

A STUDY OF ART PROJECTS THAT CONNECT SCHOOLS TO COMMUNITIES

.....
谷口 文保 先端芸術学部クラフト・美術学科 講師

Fumiyasu TANIGUCHI Department of Crafts and Arts, School of Progressive Arts, Assistant Professor
.....

要旨

本研究の目的は、学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの方法と仕組みを明らかにすることである。本研究では、次の5つの事例を調査した。「IZUMIWAKU プロジェクト」、「エイジアス」、「町ちゅう美術館」、「ホタルキノコ」、「加古川市立山手中学校におけるアートプロジェクト」である。5つの事例の調査によって、3つの有効な方法が明らかになった。それは、「プロジェクトを開く」、「プロジェクトを共有する」、「プロジェクトを育む」である。学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの仕組みは、連携と共創と継続によって構成され、共創は、表現と交流の循環によって成立していることが分かった。

Summary

The purpose of this study is to clarify the methods and mechanisms of art projects that connect schools to communities. Five cases were investigated in this study. The names of art projects are "IZUMIWAKU project", "ASIAS", "The town like an art museum", "Big mushrooms and fireflies", and "Art project of Kakogawa municipal Yamate junior high school". The study revealed three methods, clarified by five undertaken case studies: Opening of a project, Sharing of a project, and "Development of a project. The above mentioned mechanisms consist of cooperation, collaboration, and continuity. Expression and communication rely on collaboration.

1. 研究の背景と目的

1990年代から実験的に実施されはじめたアートプロジェクトは、2000年代以降、全国各地で展開されるようになった。こうした活動は、まちづくりや福祉、環境、医療など、社会のさまざまな領域と連携して実施されている。竹田直樹は、この2000年頃からのアートプロジェクトの拡がりの理由を、「9.11構造」によって自らの作品に社会性を育むようになった芸術家と、アートによる地域振興を期待する自治体、そして文化振興による社会貢献を模索する企業の3者の「思惑」が重なったためと考察している。¹⁾ こうした動向について工藤安代はパブリックアート研究の観点から、それまでの公共事業とつながるパブリックアートと異なり、「実社会とのつながりを強く持つ芸術活動」とであると指摘している。²⁾ こうしたアートプロジェクトの中には、教育と連携して実践されているものも多い。

近年、学校で芸術家が授業を行う活動を支援するNPO組織の設立や、地域住民と児童・生徒の共同制作によるプロジェクトなど、学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトが、全国各地で実施されるようになってきている。このようなアートプロジェクトの多くは、総合的な学習の時間や図画工作・美術の授業の一環として学校が中心となって実施されている。このような状況は、学校と地域社会の可能性として、アートプロジェクトが評価され、期待が寄せられていることの証明であると言えよう。学校に芸術家を招くことによって授業や学校組織を活性化する。プロジェクトによって地域社会と学校をつなぎ、「開かれた学校」³⁾を実現することで、地域社会と連携した教育体制を再構築する。疲弊した商店街や、落書きが目立つ公園を児童・生徒の壁画で再生し、町の活性化につなぐ。⁴⁾ 学校内の授業では体験できない、アートプロジェクトを通したリアリティのある社会参画は、児童・生徒に社会の一員としての自覚と、自信を培う機会を与えるものとなっているのではないだろうか。また、こうした活動を、既存の地域資源の再構成によって新しい価値を創出していく「持続可能な共生社会」の構築のは

じまりと捉えることはできないだろうか。

全国各地で、こうしたアートプロジェクトが一般的な活動として実施できるようになれば、学校教育や地域づくりにおいて、大きな成果が期待できるだろう。しかし、こうしたプロジェクトの多くは、高い実践力を有する一部の教師や、社会的関心の高い芸術家やNPOによって支えられているのが実情である。学校教育と芸術創造の可能性を拡大していくためには、汎用性のある理論の構築が課題であると思われる。

芸術や教育、地域づくりなど、異なる分野が連携するこうした活動は、成果も複合的であるため、その考察には総合性が求められる。本研究では、このような観点から、学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの企画・運営について、効果的な方法を抽出し、その仕組みを明らかにすることを目指す。

2. 学校と美術

学校と地域社会をむすぶアートプロジェクトを考えるためには、学校と美術の関係を振り返っておく必要がある。本章では、学校教育における図画工作・美術の歴史や教育的意義を確認し、美術教育や学校の課題をアートプロジェクトの観点から考察する。

2-1 日本の美術教育

学校教育における美術は、時代とともにその目的や意義も変化していった。日本の学校教育は、1872年(明治5年)の学制公布にはじまるが、1879年(明治12年)には、東京師範学校に図画科が設置されている。当時の図画教育は、天気図や幾何学などの作図に向けての基礎的学習が目的であった。このような実学的な教科として始まった美術教育は、内外の教育運動に影響を受けながら少しずつ現在の姿に近づいていく。

1904年(明治37年)の図画取調委員会の報告書には、「凡ソ普通教育ニ於ケル学科ハ精神的ナル手段ヲ以テスルモノト形体的ナル手段ヲ以テスルモノトノ外ニ尚ホ直接ニ心身両者ノ働ヲ結合スル所ノモノアルニアラスンハ決シテ完全ナリト云フヘカラス」として、「図画」

が心身を結合して実施される教育であり、普通教育になくなくてはならない教科であると指摘されている。⁵⁾ さらに長野県神川小学校における講演「児童自由画の奨励」（1918年）から始まる山本鼎による「自由画教育運動」によって、子ども中心の美術教育が確立され、現在の美術教育につながる基礎が形成されていった。⁶⁾戦後は、学習指導要領の公布によって、民主主義に基づく図画工作・美術教育が実践された。近年では、従来の絵画、彫刻、工芸、デザイン、鑑賞といった分野以外に、映像メディアが導入され、「写真、ビデオ、コンピューター等」の授業への活用が進んでいる。⁷⁾そのため、美術の教科書には従来の絵画や彫刻と並んで、漫画やアニメーションの作品が掲載されるようになってきている。

2-2 美術教育の特性と意義

このように学校教育における図画工作や美術は、その目的を発展させながら現在のような形になってきたが、その教科としての特性はどのように位置づけられているのだろうか。図画工作や美術は、数学や歴史といった理論や知識を学ぶ教科と異なり、手を動かして作品を制作し、表現するところに教科の特性がある。フランツ・チゼック（1865-1946）やジョン・デューイ（1859-1952）の子ども中心の教育の提唱は、現在の美術教育の根本を支える基礎となっている。米国の哲学者ジョン・デューイは、その経験主義による教育哲学において、手工や理科などとともに図画を重要な教科として取り上げている。彼は著書「学校と社会」（1899年）の中で学校を、「小型の社会、胎芽的な社会」に変革していくことを目指し、それまでの知識中心の受動的な学習から、作業を通した子どもの主体的学びと社会とつながった学校の実現を提唱した。彼は学校が、「一つの有機的な全体であるようなもの」となるために、「学校を生活とどういう工合にむすびつけたらよいか」を実践的に検討しているが、そこでは芸術が大変重視されている。⁸⁾「絵画と音楽、すなわち造形芸術と聴覚芸術は、学校でおこなわれるすべての作

業の頂上であり、理想化であり、洗練・純化の極点である」と述べ、生活から発生し、発展した芸術を、「思想と表現手段との生きた結合」とであると高く評価している。⁹⁾

小学校学習指導要領において図画工作の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」と表記されている。そして解説では、その内容を説明する中で、「基礎的な能力」は「他者や社会、自然や環境などの多様な関係の中で活動することによって培われる」とし、図画工作の学習が、「生活や社会に主体的に関わる態度を育てる」と指摘している。¹⁰⁾そこには確かに、学校における美術教育を高く評価したデューイらの思想が継承されているのである。

2-3 美術教育の課題とアートプロジェクト

現在、わが国の中学校、高等学校の美術の授業は、時間数の削減や専任教員の減少などが続き、現場に立つ教員には危機感が高まっている。¹¹⁾平成10年に公布された学習指導要領において、総合的な学習の時間や情報など、新しい教科が導入され、学校完全週5日制の実施によって学校全体の授業時間数が少なくなっていた。また、少子化に伴う学校の統廃合によって教員数が削減されつつある。このような中で、学校教育における図画工作や美術は、その存在意義を再確認し、教科としての可能性を探ることが重要な課題となっている。

総合的な学習の時間は、2002年（平成14年）から正式に導入された教科である。その目標は、中学校学習指導要領解説に、「横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」と表記されている。¹²⁾その

学びは、調べ、考察し、表現することで実現され、他教科との連携や総合が重要で、協同作業や、地域連携も有効であると指摘されている。以上のことから、図画工作や美術と総合的な学習の時間の連携は、効果的であり、大きな可能性を孕んでいると思われる。

1987年（昭和62年）の臨時教育審議会第3次答申では、「開かれた学校」が提唱され、学校施設の社会教育への解放や、学校運営に地域社会が関与していくことの重要性が指摘された。¹³⁾ 2006年（平成18年）に改正された教育基本法の第12条は、社会教育に関する条文である。そこには学校を含む公共施設の利用が社会教育を推進する方法として明記されている。また、第13条には、学校と家庭および地域住民の相互連携や協力について記述されている。これらは、生涯学習社会の実現が現代社会の課題であることを示し、学校と地域社会の変革を求めるものであると考えられる。こうした学校をとりまく課題に、図画工作や美術はさまざまな貢献が可能なのではないだろうか。図画工作や美術は、表現を通して他者との交流を創出し、現実の生活とつながっていくことが容易に実現できる教科である。さらに、総合的な学習の時間と連携することで、学校と地域社会をつないだ学習を実現することができるだろう。それは正にアートプロジェクトである。

このように、近年、アートプロジェクトが盛んに試みられている背景には、こうした美術教育や学校の課題が影響していることが推察されるのである。

3. 研究の方法

本研究は、学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトについて、効果的な方法を抽出し、その仕組みを明らかにすることを旨とするものである。学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトは、異なる分野が連携した複合的活動であるため、複眼的検証を行い、総合的に考察する必要がある。そこで本研究では、学校教育、芸術表現、地域づくりの3つの観点から実践事例の成果を検証する。これらを総合的に考察することで、

その方法や仕組みを明らかにする。

まず、実践事例の検証に入る前に、こうしたアートプロジェクトを大きく3つに分類する。分類については、活動がどこで行われているかという点に注目する。すると、「学校の中」「学校の外＝地域社会」「学校と地域社会の両方」の3つに分類することが出来る。この分類に基づいて本研究ではそれぞれの活動を、「学校共創プログラム」「地域共創プログラム」「学校・地域共創プログラム」と表記する。

学校共創プログラムは、学校の校内に芸術家や地域住民など外部の人々を招き入れ、児童・生徒および教師と連携した活動を創出するプログラムである。地域共創プログラムは、児童・生徒および教師が学校を出て、地域社会に入り、地域住民と連携した活動を行うプログラムである。学校・地域共創プログラムは、学校と地域社会を児童・生徒や教師、そして地域住民や芸術家が行き来して、連携した活動を行っていくプログラムである。

本研究では、学校共創プログラムの実践事例として、事例1「芸術家と小学生プロジェクト（ASIAS＝エイジラス）」（以下、エイジラスと表記する）、事例2

「IZUMIWAKUプロジェクト」を取り上げ、検証する。地域共創プログラムについては、事例3「町ちゅう美術館」を取り上げ、学校・地域共創プログラムについては、事例4「ホテルキノコ」と、事例5「加古川市立山手中学校のアートプロジェクト」を実践事例として検証する。これらの事例を検証の対象とした理由は2つある。1つ目の理由は、事例3、4、5が筆者の在住する兵庫県内で実施されたプロジェクトであるため、聞き取り調査や現地調査など、詳しい検証作業が実施可能だったためである。なお、事例4は筆者自身が企画したプロジェクトである。そこで、検証の一般性を確保するために、学校・地域共創プログラムの検証事例として、事例5を対象に加えることとした。もう1つの理由は、学校共創プログラムについて、筆者の近隣に研究対象として適切な事例が確認できなかったため、全国的に著名で、参考文献も豊富な事例1、2を

対象とすることとした。なお、学校共創プログラムには、芸術家を学校の授業につなぐ活動と、学校施設の新たな活用を実践する活動があるため、それぞれの代表的事例である「エイジアス」と「IZUMIWAKUプロジェクト」の2つを取り上げることとした。

5つの事例は全て、国内で普通教育を実施している学校での実践である。また、その開始時期は、1994年から2007年である。こうしたことから、5つの事例は、1990年代後半から2000年代にかけての地域社会の問題や学校教育の課題などを共有していると思われる。よって本研究は、上記の年代に国内の学校において実施された、学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトについての検証として適切な成果が得られるものと考えられる。一方で本研究は、学校区分や実施地域といった観点から検証事例を選定していない。これが本研究の限界である。

本研究では、5つの実践事例について、文献や聞き取りによる調査を実施した。事例1、2は、文献調査を実施した。主な参考文献は、関連するwebサイトや出版物である。事例3、4、5は、それぞれプロジェクトの中心となった人物に1～2時間の聞き取り調査を実施した。さらに事例5は、プロジェクトを体験した生徒1名（現在、大学3年生）に、聞き取り調査を実施した。

4. 学校共創プログラム

学校共創プログラムは、校内に芸術家や地域住民を招き入れることで、学校を開き、従来の学校教育の幅を広げる活動である。このプログラムは、学校教育に地域住民の参画を促進し、学校に対する地域の認識を変革する活動にも展開できる。米国や英国では創造性を育むことを目的に、国や州が芸術家を学校に派遣する活動を支援している。英国では、2002年から芸術家を学校に派遣する「クリエイティブ・パートナーシップ」が設立され、全国的に実施されている。わが国においても、1990年代後半からNPOなどの中間組織によって、学校と芸術家を結ぶ社会的活動が始まってい

る。現在では、「S-AIR」（札幌、1999年）、「芸術家と子どもたち」（東京、1999年）、「芸術資源開発機構」（東京、1999年～）、「CANVAS」（東京、2002年～）、「アートサポートふくおか」（福岡、2002年～）、「子どもとアーティストの出会い」（京都、2004年～）、「ハート・アート・おかやま」（岡山、1999年～）など、全国の主要な都市にこのような社会活動を展開するNPOの存在を確認することができる。¹⁴⁾ 学校に地域住民を招き入れ、学校を起点にアートプロジェクトを展開する活動としては、1994年の東京都杉並区立和泉中学校における「IZUMIWAKUプロジェクト」が、有名である。名古屋市立千種台中学校で実施された「千種台コミュニティー美術館プロジェクト 学校が美術館」（1998年、2000年）も地域の大きな話題となった。こうした活動は、まさに「開かれた学校」の実現であり、地域における学校の潜在的可能性を示す活動であった。同様の活動としては、小学校の100周年事業として地域を巻き込んでアートプロジェクトを実施した、「アートワークみの」（岡山市立御野小学校、1995年）や、芸術家と中学生が共同制作を行い、その作品を展示することで学校を美術館化した、「とがびアートプロジェクト」（千曲市立戸倉上山田中学校、2004年～）などがある。

本研究では、「IZUMIWAKUプロジェクト」と「エイジアス」を検証した。以下に記す2つの検証は、関連出版物や個人および団体のwebサイトの掲載情報などに基づいて作成したものである。

4-1 事例1「芸術家と小学生プロジェクト」

4-1-1 事例1の概要

実施時期：1999年発足、2001年からNPO法人として活動を展開している。

実施会場：小学校、中学校、幼稚園、保育園

主催団体：NPO法人芸術家と子どもたち

活動概要：

ASIAS（Artist's Studio In A School：エイジアス）は、「プロの現代アーティストが小・中学校や保育園、

幼稚園などへ出かけていって、先生と協力しながらワークショップ型の授業等を実施する活動」¹⁵⁾である。NPO 法人芸術家と子どもたちのコーディネーターは、教員や自治体からの依頼に基づいて派遣するアーティストを検討し、アーティストと学校教員の打ち合わせや、ワークショップの実施を支援する。活動は、企業や各種財団からの助成や寄付で運営されている。堤康彦代表は、学校教員との対話を通して外部の人間が学校で授業を行うことの価値と可能性を感じ、企業からの協賛を得てこの活動を開始している。学校現場に不足している芸術家とのネットワークや活動資金を、NPO が支援することで、学校と芸術家をつないだ授業が実現したのである。芸術家は、美術だけでなく音楽、ダンス、映画、パフォーマンスなど多様である。宮島達男（2001年、東京都大田区立久原小学校）や島袋道浩（2001年、東京都練馬区立和光小学校）など、著名な現代美術作家も多数参加している。活動が始まった2000年度に参加者350人、実施校7校、芸術家9人だった実績は、2010年度には、参加者2,900人、実施校65校、芸術家36人にまで拡大している。さらにNPO 法人芸術家と子どもたちでは、地域をテーマに親子を対象とした活動を始めるなど、事業に幅が出ている。

4-1-2 事例1の成果

学校教育における成果については、プロの芸術家と小学生によるワークショップや交流を通して、現代芸術や芸術家への理解が促進されている点が挙げられるだろう。また、芸術家とのネットワークや、企業や財団からの助成金の確保など、学校で実施するうえで障壁となる問題を、NPO による社会事業とすることで解決し、継続的な活動を実現していることも重要である。

芸術創造における成果は、NPO によって企画運営されているため、学校現場と連携しつつも、芸術的に質の高い内容を維持していること。その活動の多くは実験的で、創造的である。それは、子どもたちにとって教育的価値のある活動であると同時に、「アーティスト

にとっても刺激的な場になること」を目指した成果であると言える。¹⁶⁾そのため、学校教育では得がたい経験が得られる魅力的な活動になっている。

地域づくりに関しては、学校を超えた地域的な広がりのある活動として継続的な展開を実現している。これは、従来の学校主体の芸術教育、美術館などによる芸術文化の振興、行政や企業による文化政策や文化支援とは異なる仕組みである。場所や財源、ネットワークなど、さまざまな組織をヨコにつないだNPO ならではの芸術文化振興であると考えられる。

4-2 事例2「IZUMIWAKUプロジェクト」

4-2-1 事例2の概要

実施時期：1994年、1995年

実施会場：東京都杉並区立和泉中学校

主催団体：学校美術館構想展実行委員会

共催団体：杉並区立中学校教育研究会美術部会

活動概要：

杉並区立和泉中学校の美術教師で、芸術家としても活動する村上タカシ教諭（当時）が展覧会で提案した「学校美術館構想」がきっかけとなって実現したアートプロジェクト。中学校の夏休み期間を活用し、教室や廊下などで現代美術の芸術家22人が作品展示やパフォーマンスを行った。中学生や保護者が作品設置や運営を手伝い、地域からたくさんの来場があった。芸術関係者だけでなく、学校を美術館化した初めての試みとして社会的に大きな注目を集めた。1996年に開催された第2回展は、「学校アーツ・センター構想」として企画され、地域の文化拠点としての「学校」の可能性を探る社会教育活動となった。（写真1、2）

4-2-2 事例2の成果

このプロジェクトの学校教育上の成果は、機能している学校を美術館化するという日本で初めての試みを実現させたことにある。このプロジェクトによって、地域におけるアートセンターとして学校施設を活用していく可能性が具体的に提示されたと言える。その社会



(写真1) IZUMIWAKU プロジェクト (村上タカシ撮影)



(写真2) IZUMIWAKU プロジェクト (村上タカシ撮影)

の影響としては、1998年に名古屋市立千種台中学校で開催された「千種台コミュニティー美術館プロジェクト 学校が美術館」の実現が挙げられる。「学校が美術館」を企画した四宮敏行教諭（当時）は、村上からプロジェクト運営のノウハウを学び、参考にしている。四宮は、「村上さんとの出会いがなければ、私たちの「学校が美術館」は実現していなかっただろう」と述べている。¹⁷⁾

学校における「地域との連携」や「開かれた学校」に向けた事業としても成果があった。PTAのサポートや、多数の地域住民の来場は、地域における学校の印象を大きく変えるものであったと思われる。作品の設置や会場の運営を通して、中学生と芸術家や地域住民との交流が実現したことも、中学生の社会参画への一歩として評価できる。特に芸術家との直接的交流は、現代美術のアウトリーチ事業として効果的であることを示している。

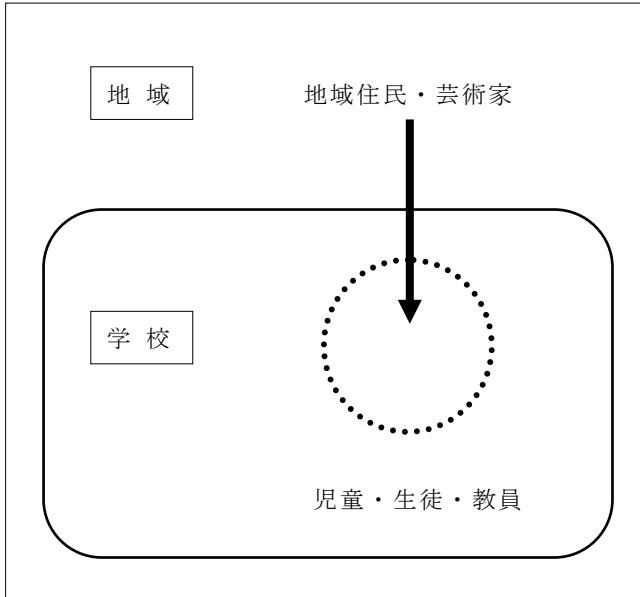
芸術創造の面では、実際に使用されている学校を表現の舞台としたことで、パブリックアートの可能性や意義について考えるきっかけをつくったことが成果であると言えよう。このプロジェクトは、公共空間における芸術表現と言えば「彫刻のあるまちづくり」であったわが国のパブリックアートの状況に対して、全く異なるアプローチを提示した。また、美術館やギャラリーといった美術専門ではない施設での展示という観点から捉えれば、オルタナティブスペースとしても興味深い事例である。空ビルや廃校を、美術館化したオルタナティブスペースは米国の「P.S.1」（1971年設立）を代表に、国内外に先行事例があるが、機能している学校を美術館化する試みは、少なくともわが国ではこのプロジェクトが初めての事例である。アートプロジェクトとしても時期的に早く、重要な実践と位置づけられる。

地域づくりの成果としては、幅広い人々をつなぐ事業となったことが挙げられるだろう。このプロジェクトは、村上の個展会場での提案が来場者の話題となり、具体的なプロジェクトに発展していったものである。そのためプロジェクトの運営には、OLや学芸員、芸術家など、学校や周辺地域とは直接関係のない市民も参加している。つまり、アートプロジェクトによって学校の内外だけでなく、地域の内外をも結ぶこととなっているのである。

4-3 学校共創プログラムの方法と仕組み

まず、これまでの事例1、事例2の検証から、学校共創プログラムの仕組みを考察する。これらのプロジェクトは、地域社会における学校が、その内部に芸術家や地域住民を招き入れ、児童・生徒との表現を通じた交流を創出することによって展開されている。つまり、学校共創プログラムは、アートプロジェクトの実施によって学校に外部の人々が入り、内部の人々との共創の場を創出する仕組みとなっている。それを図示すると（図1）のようになる。点線で示された円は、プロジェクトの現場である。そこには、児童・生徒と

芸術家や地域住民による、表現と交流の循環が生まれ、共創の場が成立している。



(図1) 学校共創プログラムの仕組み (筆者作成)

次に事例1、事例2に共通している方法を考察する。共通している方法は2つある。1つは、どちらもプロジェクトの企画運営が、NPOや、実行委員会のような学校の外部組織によって行われていることである。学校内部の活動にしようとする、職員会議などを通じた調整作業が膨大になってしまうが、外部の組織が届けを出して使用する形にしたり、NPOが学校教育を支援する形にしたりすることで、スムーズな進行が可能になり、プロジェクトの創造性を担保することができる。共通するもう1つの方法は、どちらの事例も、学校の外からプロの芸術家を招き、そのプロジェクトを通じた児童・生徒との交流を実現していることである。芸術家との連携は、プロジェクト全体の表現の質を高め、芸術関係者やマスメディアからの評価や注目につながっている。そのことが、地域住民など、外部からの観客を増やすことにつながったと思われる。以上のことから、学校共創プログラムの企画運営には、「外部組織による企画運営」と、「芸術家との連携」が有効な方法であることが明らかになった。

5. 地域共創プログラム

地域共創プログラムは、児童・生徒や教師が学校を

出て、地域社会において表現活動や、表現を通じた地域住民との交流を行うプログラムである。こうした地域共創プログラムは、近年では総合的な学習の時間や美術部の活動として、各地の学校で取り込まれている。公園の遊具や商店街のシャッターを彩色し、地域の活性化に貢献するといった活動は、このプログラムに分類される。本研究では兵庫県立龍野実業高校デザイン科で実施されてきた「町ちゅう美術館」を実践事例として取り上げる。活動が9年間継続していることや、町づくりとしての展開などから、学校と地域社会をつないだ成功事例であると思われる。

本研究では検証のため「町ちゅう美術館」を第1回から指導されてきた兵庫県立龍野北高校の清水浄教諭に聞き取り調査(2011年7月19日実施)を実施した。また、筆者はほぼ毎年、「町ちゅう美術館」を見学している。こうした経験も考察を進める上で役に立った。実施時期や会場数などのデータは、龍野北高校総合デザイン科のwebサイトの掲載情報に基づいて作成したものである。

5-1 事例3「町ちゅう美術館」

5-1-1 事例3の概要

実施時期：2003年～2011年

実施会場：たつの市景観形成地区

主催団体：兵庫県立龍野実業高校デザイン科（同校は2010年に、新宮高校と統合して閉校となった。「町ちゅう美術館」は、統合によって誕生した龍野北高校総合デザイン科に引き継がれて、継続されている）

活動概要：

「町ちゅう美術館」は、兵庫県立龍野実業高校デザイン科が2003年から実施している卒業制作展である。文化ホールのギャラリーで開催していた卒業制作展の観客数を増やそうと、町中の空き店舗を利用した作品展示を行ったのが活動のきっかけとなった。毎年2月中旬に、城下町の風情を残す景観形成地区で開催されている。デザイン科の生徒作品の展示(写真3)が中心であるが、期間中は保育園や幼稚園との共同制作の

展示（写真4）や、地域の芸術家や高齢者のグループ展など、地域連携によって展覧会が多数開催される。2011年2月に開催された「町ちゅう美術館」では、公民館、商店街の空き店舗、企業の資料館、寺院など50カ所で展示が行われた。龍野北高校への統合が進められていた2009年2月の「町ちゅう美術館」では、景観形成地区に加えて閉校される龍野実業高校の校舎も展示会場となり、卒業生や地域住民が多数訪れた。こうした活動は、「朝日のびのび教育賞」（朝日新聞社、2006年）や「学生街づくり部門特別賞」（日本都市計画家協会、2009年）の受賞につながっている。

5-1-2 事例3の成果

地域づくりの成果としては、プロジェクトを通して保守的だった地域が開かれ、町の活性化に大きく寄与していることが挙げられる。当初、地域住民は空き店舗の使用に消極的であったが、高校生との交流が生まれ、プロジェクトが継続していったことで、理解や協力が得られるようになっていった。地域の恒例事業として認知が進み、来場者も増加し、たつの市の商工観光課から、「若い力で市の活性化に貢献してくれている」と評価されるようになっていった。¹⁸⁾ 第1回の観客動員数200人が、第9回には12,000人となり、地域の観光政策の面からも注目されている。地域づくりとしては、高齢者の工芸教室の展覧会との連携も注目される。この「町ちゅう美術館」の活動は、同じ地域に暮らす表現者同士が、世代や専門性の違いを超えて連携し、展覧会の同時開催を実現している。そのことで、高齢者と高校生の文化交流が生まれている。地域の展覧会では、出品者の家族や関係者が主な観客となる。そのため、それまで高齢者のグループ展に、高校生が訪れることはなかったそうである。こうした年齢層による文化交流の分断が、このプロジェクトによって崩されている。

学校教育面での成果としては、高校生の地域社会に対する意識の高まりが確認できた。展示作業や公開制作などを通して、地域住民と高校生の交流が創出され、



（写真4）町ちゅう美術館の展示風景
（兵庫県立龍野北高校 HP より転載）



（写真5）幼稚園との連携で制作された壁画
（兵庫県立龍野北高校 HP より転載）

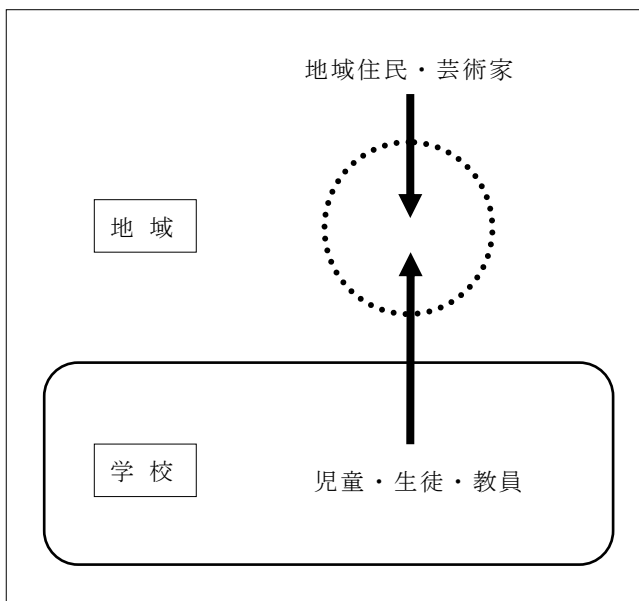
相互理解が深まっていった。景観形成地区は、龍野実業高校の通学路であったため、このプロジェクトが始まってから高校生と地域住民との間に「あいさつ」が交わされるようになった。

芸術表現の面からは、町を表現の場に変容させていくことに大きな成果があった。幅広い地域連携によって世代や専門性を越えた芸術文化関係者の参画を実現できたことは、地域交流に留まらず芸術文化振興の面からも効果的であったと言える。この点については、芸術家を中心としたプロジェクトではなく、地域の高校生が中心となったことの意義も大きいと思われる。個々の作品の完成度や専門性の高さ以上に、地域の若者の頑張りが、地域からの支援や連携を引き出してい

ったと推察できるからである。景観形成地区では毎年、2月は「町ちゅう美術館」が開催され、3月は「雛祭り」、4月は「さくら祭り」が開催されて、地域の内外から多数の観光客が訪れる。「町ちゅう美術館」は地域に新しい祭りを創出しつつあると言えるのではないだろうか。

5-2 地域共創プログラムの方法と仕組み

これまでの事例3の検証から、「地域共創プログラム」の仕組みを考察する。このプロジェクトは、学校から児童・生徒および教師が、その外部である地域社会に出て、地域住民と表現を通じた交流を創出することによって展開されている。それを図示すると（図2）のようになる。点線で示された円は、プロジェクトの現場である。そこには、生徒と地域住民による、表現と交流の循環が生まれ、地域に共創の場が創出されている。



（図2）地域共創プログラムの仕組み（筆者作成）

次に事例3の検証をもとに、その有効な方法を考察する。有効な方法は2つ挙げられる。1つは、プロジェクトを通して地域の表現者の連携を実現していることである。事例3では、プロジェクトの中心である高校生と、地域の芸術家や工芸を学ぶ高齢者、幼稚園児など、経験も世代も異なる多様な人々をつなぎ、同時に作品発表する場を成立させている。それによって年

齢層を超えた文化交流が実現され、町を表現と交流の循環する場に変えることに成功している。そして、活動の継続によって連携が拡大し、結果として地域における認知度の向上、観客動員数の上昇といった成果につながっている。それは、地域に別々に存在していた表現者を、アートプロジェクトによってつないだ成果である。もう1つは、社会的評価の向上である。事例3は、新聞などメディアでの紹介や、来場者の増加、朝日のびのび教育賞の受賞など、さまざまな形で社会的評価を受けている。それは、高校生たちを勇気付けると同時に、地域住民の認識を変容させ、プロジェクトへの期待を高めていった。地域共創プログラムは、プロジェクトを実施する場が地域社会であるため、地域住民の理解や協力はプロジェクトの成否に関わる重要な要素である。当初、保守的だった地域住民が、恒例行事として期待するようになり、協力的になっていった背景には、こうした社会的評価の向上が重要であったと思われる。以上のことから、地域共創プログラムの企画運営には、「地域の表現者との連携」と、「社会的評価の向上」が有効な方法であることが明らかになった。

6. 学校・地域共創プログラム

学校・地域共創プログラムは、学校と地域社会の両方に跨って、表現や交流を創出していく活動である。地域住民や芸術家を学校に迎え入れるとともに、児童・生徒が地域に出かけて活動を行うこととなる。本研究では姫路市立安富北小学校で実施された「ホテルキノコ」と、加古川市立山手中学校の2004年から2006年にかけて実施された「アートプロジェクト」を実践事例として取り上げる。

本研究では検証のため事例4は、実践の中心であった姫路市立手柄小学校の橋本忠和主幹教諭に聞き取り調査（2011年6月25日実施）を実施し、橋本の博士課程研究論文に基づいて検証をおこなった。事例4は、橋本と筆者が連携して実施したプロジェクトであることから、筆者の実践報告や記録資料も活動を振り返る

重要な資料となった。事例5は、実践の中心であった神戸親和女子大学の神吉脩教授に聞き取り調査（2011年7月13日実施）を実施した。また、当時プロジェクトに参加した生徒に、聞き取り調査（2011年7月14日実施）を実施した。文献に関しては、「学校が元気になる！アートによるコミュニティ活動の実践」（神吉他編著、2006年）に基づいて検証を行った。

6-1 事例4「ホタルキノコ」

6-1-1 事例4の概要

実施時期：2007年

実施会場：姫路市立安富北小学校とその周辺地域

主催団体：姫路市立安富北小学校

活動概要：

姫路市立安富北小学校の橋本忠和教諭（当時）による環境芸術を教材とする図画工作の授業や、ホタルの飼育放流による環境教育などをつないで市民教育へと展開するプロジェクトに、筆者が芸術家として連携し、アートワークショップ「ホタルと仲よし光るキノコづくり」を実践した活動。制作にいたる過程は、学校内で図画工作や、総合的な学習の時間の一環として実施された。制作の直前には、芸術家である筆者が授業を行い、児童と芸術家の交流や、活動目標の共有が図られた。小学校の体育館で、小学生が古新聞や間伐材を用いて各自高さ1mのキノコを制作した。（写真5）出来た55本のキノコは、各自が担いで近隣の川まで運び、川沿いの岸辺に設置して、大規模なインスタレーション作品を実現した。（写真6）制作には保護者や中学生、大学生が参加し、キノコの設置には自治会の協力も得られた。蓄光塗料を塗ったキノコは、夜になるとボンヤリと光り、数十匹のホタルとの光のコラボレーションが実現した。その幻想的な光景は、制作した児童だけでなく、活動を支援した大学生や地域住民にとっても感動的な体験となった。新聞やテレビで紹介されたこともあり、多数のホタル見物客が地域を訪れ、周辺住民が作品紹介や、作品の保全を自主的に行う姿も見られた。キノコは一旦、小学校に回収されたが、



（写真6）川沿いに設置されたキノコ（2007年、筆者撮影）

児童の発案でその年の10月に山の遊歩道に設置された。この「キノコの散歩道」プロジェクトは、自治会と老人会の協力で実現し、地域イベントとなった。

6-1-2 事例4の成果

学校教育上の成果は、地域住民との連携や大学生の参加によって「開かれた学校」を実現していることと、図画工作と総合的な学習の時間をつなぎ、小学生の社会参画を実現した点が挙げられる。活動がテレビや新聞で紹介されたことで、ホタル見物客が増加し、地域の活性化に貢献した。このことは小学生たちにとって社会参画への自信となり、「キノコの散歩道」の実現につながった。橋本はこうしたプロジェクトの展開を市民教育としての学習成果として分析している。芸術家との連携も重要であった。アンケート結果から、小学生の芸術への親しみや関心が増進したことが判明している。

芸術創造としての成果は、地域の美しい自然環境を活かしたインスタレーションを実現したことである。特にキノコとホタルとの光のコラボレーションは、多くの参加者を感動させた。動物や昆虫を表現の素材とする現代美術作品は多数存在するが、ホタルの光を表現素材とする作品は見当たらない。自分たちの飼育したホタルと、自分たちが作ったキノコ作品とのコラボレーションは、小学生にとって環境学習と芸術創造をつないでいく体験として、効果的なものになった。

地域づくりとしての成果は、「ホタルキノコ」の実

現によって、自治体や老人会に、学校の活動への理解と協力姿勢が形成されたことが挙げられる。橋本は、学校からの新しい提案や協力要請に対して、不安よりも関心をもって取り組んでもらえるようになったと述べている。そしてその理由は、「ホタルキノコ」が実現したことで、学校の地域活動を視覚的に共有できたためと指摘している。最後に、「キノコの散歩道」は児童の発案と、地域からの期待が重なったところに生まれた活動であった。この出来事は、地域の新しい文化の芽がアートプロジェクトによって誘い出されたと考えることも可能であろう。

6-2 事例5「加古川市立山手中学校のアートプロジェクト」

6-2-1 事例5の概要

実施時期：2004年～2006年

実施会場：加古川市立山手中学校とその周辺地域

主催団体：加古川市立山手中学校

活動概要：

2002年に加古川市立山手中学校の美術教師であった神吉脩教諭（当時）によって実践された「地域注文アート」がきっかけとなって、2003年から2006年までの美術と総合的な学習の時間などの授業や、美術部の課外活動で展開されたアートプロジェクト。地域の高齢者を多数、絵画モデルとして学校に招き、そのスケッチをもとに版画を制作し手渡す、「高齢者交流アート」（2003年）。地域の商店と連携して、店長の等身大絵画「店長画」を制作し、商店にプレゼントして地域活性化に取り組んだ、「商店街アート」（2004年）。通学路の錆びついた道路フェンスを塗りなおし、花模様を描いたテントシートを設置した、「道路ふれあいアート」（2005年）。こうした活動と並行して美術部員を中心に、高齢者福祉施設の入所者の誕生日に絵画を届けた、「アート宅配便」（2004年）などが実施された。また、総合的な学習の時間の活動として、阪神淡路大震災をテーマとする巨大壁画や陶ランプなどが毎年1月17日の「震災の日」のセレモニーに向けて制作された。

このように、同中学では2004年から2006年にかけて、美術表現を通して学校に地域住民を招いたり、中学生が地域に参画したりする活動が継続的に実施された。

このプロジェクトについて神吉は、「小学校時代に「学級崩壊」や荒れなどの困難を経験し、心の拠り所や自分のよさを見いだせなかった生徒たちを対象にし



（写真7）「商店街アート」が実施された商店街周辺
（2011年、筆者撮影）



（写真8）展示されている「店長画」（2011年、筆者撮影）

た」と述べている。¹⁹⁾ 事例4のような芸術家との交流はなく、中学生と地域住民の交流を起点に、相互理解と地域づくりがさまざまに試みられているところに特長がある。聞き取り調査の中で神吉は、これらのプロジェクトが芸術表現としてではなく、中学生の地域参画による教育として実施されたものであることを強調している。参考にした芸術家やアートプロジェクトは特になく、ジョン・デューイの思想や、W・H・キ

ルパトリック（1871-1965）のプロジェクト・メソッドを念頭においた活動であったという。神吉は、労働を中心に営まれている地域社会に中学生や高齢者が本格的に参画するには、アートが最も有効な方法であると指摘している。それは、子どもや高齢者の社会参画といった観点からアートプロジェクトの可能性と意義を示すものである。

6-2-2 事例5の成果

このプロジェクトの教育的成果は、中学生が地域住民との交流を通して、人間的に成長していったところにある。中学生と高齢者の相互理解を目的に実施された「高齢者交流アート」では、中学生と高齢者の間に声を掛け合ったり、手紙を交換したりといった日常的な交流が生まれている。「地域注文アート」や「商店街アート」で、地域の人から感謝され、褒められて中学生が変化していったと神吉は振り返る。地域から注文を受けた絵画や「店長画」を、手渡しする中でコミュニケーションが創出され、人間的な成長が起こっていったと言える。（写真7、8）

地域づくりの成果は、道路フェンスの装飾や商店街への「店長画」の展示などによって、地域が活性化したことと、その活動を通して地域住民が中学生を評価し、相互理解による人間関係が創出されたことが挙げられる。これらは、アートプロジェクトによる中学生や高齢者の社会参画の実現である。事例5では、学校と地域社会のそれぞれの課題をつなぎ、美術表現によってその解決が図られている。これはアートプロジェクトの社会的可能性を明確に示すものである。

芸術表現の成果は、地域と密接につながった表現を実現した点が挙げられる。それは、あいちトリエンナーレ2010において制作された、ナウイン・ラワンチャイクンの壁画（写真9）や、ジョン・アーレン&リゴベルト・トレスのパブリックアート、「ウォルトン通りの一角でのパーティ」（1985年・米国）につながるものである。前者は、その巨大な画面が地域住民の肖像で構成されていて、かつて繊維街として栄えた地域



（写真9）「新生の地」ナウイン・ラワンチャイクン

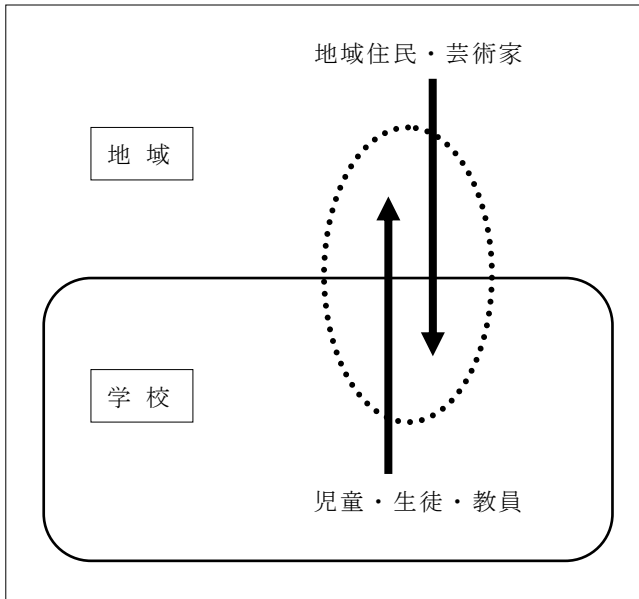
Navin Rawanchaikul （2010年、筆者撮影）

の歴史を振り返る作品となっている。後者は、アフリカ系やヒスパニック系住民の協力で作られた彩色彫刻で、マイノリティ問題や公共空間における芸術表現のあり方を問いかける作品であった。²⁰⁾ 事例5の、「店長画」や、高齢者をモデルに制作された版画は、その地域に生きる人々を作品のモチーフとすることで、こうした現代アートにつながるサイトスペシフィックな表現を獲得している。「店長画」は、中学生らしい素朴で優しい表現であるが、商店街に展示された作品の存在は、芸術表現と地域社会の関係を考えさせるものとなっている。

6-3 学校・地域共創プログラムの方法と仕組み

これまでの事例4、事例5の検証から、「学校・地域共創プログラム」の仕組みを考察する。これらのプロジェクトは、学校と地域社会を横断して、児童・生徒および教師が、芸術家や地域住民と共に表現を通じた交流を創出することによって展開されている。それを図示すると（図3）のようになる。点線で示された円は、プロジェクトの現場である。そこには、児童・生徒と地域住民や芸術家による、表現と交流の循環が生まれ、共創の場が創出されている。

次に事例4と事例5に共通している方法を考察する。共通している方法は2つある。1つは、どちらも学校に地域住民を招き入れる場面で、プロジェクトにおけ



（図3）学校・地域共創プログラムの仕組み（筆者作成）

る地域住民の役割を明確化している。事例4では、地域住民は児童の制作や設置作業の支援者としての役割が設定されていた。事例5では、地域の高齢者が、絵画のモデルとして学校に招かれる形になっていた。学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトにおいて、児童・生徒はプロジェクトの中心として具体的な役割があるが、地域住民の役割はプロジェクトによってさまざまである。他のプログラムでは、観客や傍観者であることも多い。しかし、学校・地域共創プログラムにおいては、児童・生徒と地域住民がお互いに地域社会や学校に出入りすることになる。その時、それぞれの役割が明確化されていなければ、協力や協働は困難となるだろう。特に地域住民が学校で活動する場面では、地域住民の役割の明確化は、重要な方法であると言える。もう1つは、どちらの事例も、児童・生徒と地域住民との表現の共有が図られている。事例4では、児童と地域住民が協力してキノコが設置されたが、その過程で、キノコを担いで移動している。さらに、にぎやかな設置作業や夜の鑑賞会は、近隣住民をアートプロジェクトへ誘う効果をもたらし、その表現を共有するきっかけとなっている。その共有が、地域住民の協力や理解を促進したと思われる。事例5の「商店街アート」では、「店長画」を制作した生徒達が、モデルとなった店長に作品を贈呈する場面が設定されていた。

「高齢者交流アート」において制作された版画も、生徒から高齢者への作品の贈呈式が校内で開催されている。これらは生徒にとって、地域住民の感動や評価が目に見え、体験できるという効果をもたらし、生徒の意欲や自己評価を高めることにつながっている。地域住民もこうした顔の見える活動によって、地域の中学生への評価を変容させている。「キノコ」や「店長画」を、児童・生徒と地域住民が共有することによって、相互理解やプロジェクトへの参画が深まっている。以上のことから、学校・地域共創プログラムの企画運営には、「地域住民の役割の明確化」と、「児童・生徒と地域住民との表現の共有」が有効な方法であることが明らかになった。

7. 学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの方法と仕組み

本章では、ここまで検証してきた3つのプログラムを総合的に考察することで、学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの方法と仕組みを考察する。

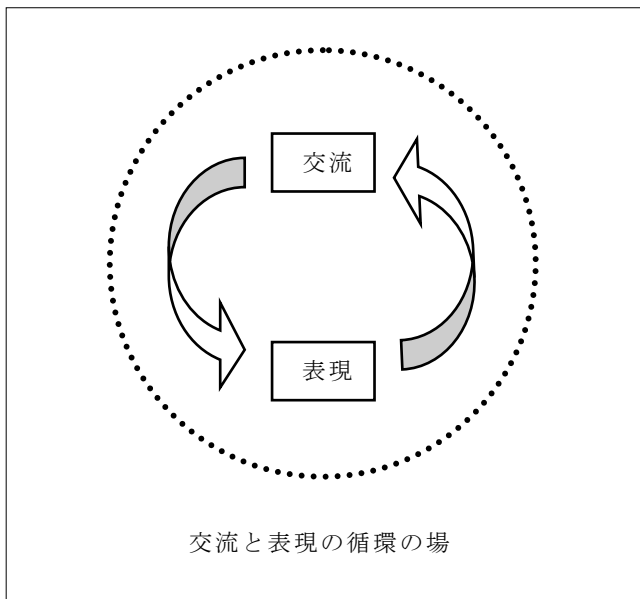
7-1 学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの方法

学校共創プログラムにおける有効な方法は、「外部組織による企画運営」と、「芸術家との連携」であった。地域共創プログラムにおける有効な方法は、「地域の表現者との連携」と、「社会的評価の向上」であった。そして、学校・地域共創プログラムにおける有効な方法は、「地域住民の役割の明確化」と、「児童・生徒と地域住民との表現の共有」であった。これらを総合的に検討すると3つの方法にまとめられる。「プロジェクトを開く」、「プロジェクトを共有する」、そして「プロジェクトを育む」である。

学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトにおいて、「プロジェクトを開く」ことは重要である。それは多様な人々の参画が可能な企画・運営を行うことを意味している。各事例をふりかえれば、学校だけで取り組むのではなく、地域社会のさまざまな組織や人と

つながり、協働していくことがプロジェクトに広がりや厚みをもたらしていた。芸術家や NPO などとの連携は、表現の質を高め、社会的評価を向上させる。まちづくり協議会や、地域の表現者との連携は、プロジェクトに地域的な価値を発生させる。学校や町を美術館にしたり、地域住民を絵画モデルとして学校に招いたりといった工夫は、「開く」ための有効な方法だったと言えるだろう。

多くの人々と、「プロジェクトを共有する」ことは、新たな連携と、継続性の向上につながっている。その共有は、表現や交流を通して実現される。5つの事例は、どのプログラムにおいても、表現と交流の循環する共創の場が創出されていた。(図4) この場を開き、その循環を充実させることが、共有を促進する。プロジェクトが共有されてこそ、地域から期待され、協力や連携が拡大する。地域の人々との共有が、児童・生徒の成長につながっていることも重要である。



(図4) 共創の仕組み (筆者作成)

「プロジェクトを育む」ことは、内容を発展させ、継続性を高めることである。プロジェクトの中から、次の展開が生まれることもよくあることである。事例4では、山にキノコを展示する新たな展開が起こった。事例3や事例5でも、当初想定していなかった活動が、プロジェクトの実践過程で発想され、実行されている。こうしたプロジェクトの臨機応変な育みが、企画・運

営における高いモチベーションと、創造的発展につながっているのである。

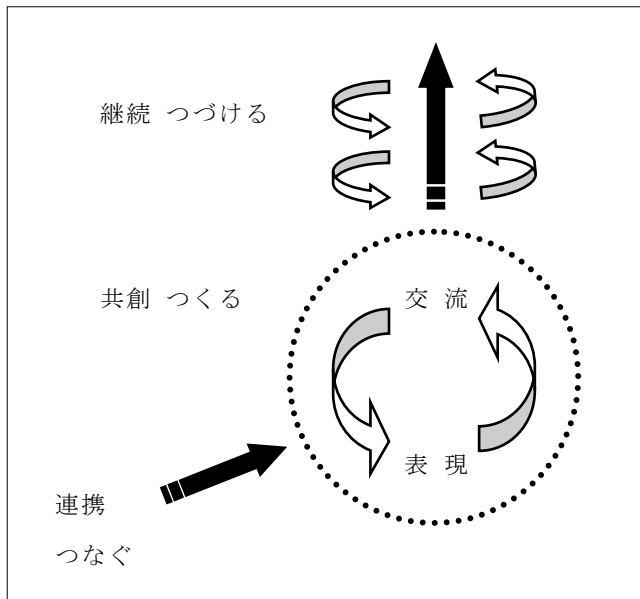
7-2 学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの仕組み

これまでの事例検証と考察から、学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの仕組みは、「連携」と「共創」と「継続」によって構成されていることが分かった。中でも「共創」は最も重要で、それは「表現と交流の循環」によって成り立っている。

学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトにおいて最も重要な仕組みは、「表現と交流の循環」である。それは、児童・生徒と、地域住民や芸術家との協働によって創出される。そして、表現を通して年齢や専門性を超えた交流が生まれ、次の表現のきっかけとなっていくのである。表現と交流、どちらか一方ではなく、その両者が循環することが重要である。本研究では、交流と表現の循環を「共創」という言葉で表してきたが、この言葉は、人々の共存から表現と交流が生まれ、創造的な活動が展開していくことを想起させてくれる。正にそのようなことが、学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの中心で起こっているのである。もちろん、こうしたアートプロジェクトは、「共創」だけでは成立しない。「共創」の前後に「連携」と「継続」の仕組みが接続されて展開されるからである。「連携」は、年齢や専門性を超えた多様な人々をつなぐことである。「継続」は、「共創」によって生み出された活動を発展させ、充実させていくことである。こうした仕組みを図示すると(図5)となる。

学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトを企画・運営する場合、(図5)のような活動の仕組みを全体的に把握し、特に「共創＝表現と交流の循環」を重視しながら、実践することが重要であることが明らかになった。

7-3 学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの課題



(図5) 学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの仕組み
(筆者作成)

本研究では、学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトについて、実践事例を取り上げ検証してきた。そこから有効な方法や、仕組みを抽出してきたが、同時に課題も見えてきた。それはこうしたアートプロジェクトの企画運営における実践力を身につけるための教育である。

今後、こうしたアートプロジェクトが普及していくには企画運営を実践できる人材が増えていくことが重要である。そのためには、その方法や仕組みを学ぶ場が必要になってくると思われる。「IZUMIWAKU プロジェクト」を実践した村上タカシは、教育現場に「プロジェクトワークを専門とする大学や講座、コースすらなく、専門の教官が教える場にほとんどいない」という問題を指摘している。²¹⁾すでに教育現場に立っている美術教師への研修なども実施される必要がある。総合的な学習の時間や、関連する他教科との連携によって実施されるアートプロジェクトは、現在の学校教育において大きな可能性を孕んでいる。図画工作や美術に限らず、さまざまな教科の教員や、芸術家、NPO、自治体関係者などのための、体験的な学びの場が創出されるべきである。これは、汎用性のある理論の構築とともに取り組まねばならない課題であると思われる。

8. 結論

本研究は、学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの企画運営における仕組みと方法を、実践事例の検証を通して考察してきた。こうしたアートプロジェクトは、その活動が展開される場によって、学校共創プログラム、地域共創プログラム、学校・地域共創プログラムの3つに分類される。

考察の結果、各プログラムについて有効な方法が2つずつ抽出された。学校共創プログラムにおける有効な方法は、「外部組織による企画運営」と、「芸術家との連携」であることが分かった。地域共創プログラムにおける有効な方法は、「地域の表現者との連携」と、「社会的評価の向上」であることが分かった。そして、学校・地域共創プログラムにおける有効な方法は、「地域住民の役割の明確化」と、「児童・生徒と地域住民との表現の共有」であることが分かった。これら6つの方法から、学校と地域社会をむすぶアートプロジェクトの方法を3つにまとめることができた。それは、「プロジェクトを開く」、「プロジェクトを共有する」、「プロジェクトを育む」である。

さらに、学校と地域社会をつなぐアートプロジェクトの仕組みを考察した。その結果、プロジェクトが「連携」、「共創」、「継続」によって成り立っていることが分かった。さらに、その中心となる「共創」は、「表現と交流の循環」によって形成されており、こうしたアートプロジェクトにおいて最も重要な仕組みであることが明らかになった。

謝辞

調査にご協力くださいました神戸親和女子大学の神吉脩教授、兵庫県立龍野北高校の清水浄教諭、姫路市立手柄小学校の橋本忠和主幹教諭に深く感謝申し上げます。本研究は九州大学大学院博士後期課程研究の一環として同大学院の藤原恵洋教授にご指導いただきました。藤原教授に深く感謝申し上げます。

注

- 1) 竹田直樹、「地域とアートのコラボレーション-環境芸術研究の資料として」、『地域とアートのコラボレーション 事例研究』、環境芸術学会、2008年、p.13.を参照。
- 2) 工藤安代、『パブリックアート政策 芸術の公共性とアメリカ文化政策の変遷』、勁草書房、2008年、pp.10-11を参照。
- 3) 臨時教育審議会、ぎょうせい編、『臨教審と教育改革第4集 「第3次答申」と開かれた学校への施策』、ぎょうせい、1987年、pp.155-159を参照。
- 4) 三嶋真人、「公園再生・すべり台大作戦」、『学校・地域が元気になる！アートによるコミュニティ活動の実践』、明治図書、2006年、pp.62-65を参照。
- 5) 大坪圭輔・村上暁郎編、『美術科教育法』、武蔵野美術大学出版局、2002年、p.250.からの引用。
- 6) 大坪・村上、同上書、p.132.を参照。
- 7) 文部科学省、『中学校学習指導要領解説 美術編』pp.78-79を参照。
- 8) ジョン・デューイ著、宮原誠一訳、『学校と社会』、岩波書店、2010年、p.31.を参照。
- 9) デューイ、同上書、p.103.より引用。
- 10) 文部科学省、『小学校学習指導要領解説 図画工作編』、p.6.より引用。
- 11) 中島隆、「「出力する授業」と新学習指導要領」、『美術手帖』、2001年3月号、2001年、pp.65-68。西村德行、「「ゆとり」がない学校』、『美術手帖』、2001年3月号、2001年、pp.61-64。鈴木弘之、「学校美術の予感』、『美術手帖』、2001年3月号、2001年、pp.90-91。以上の3つの論文を参考。
- 12) 文部科学省、『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』、教育出版、2008年、p.10.より引用。
- 13) 臨時教育審議会、ぎょうせい編、『臨教審と教育改革第4集 「第3次答申」と開かれた学校への施策』、ぎょうせい、1987年、pp.155-159を参照。
- 14) 吉本光宏、「「アート」から教育を考える -国内外のチャレンジから-」、『ニッセイ基礎研 REPORT』、2007年5月号、2007年、pp.10-17、のpp.13-14より引用。
- 15) NPO 法人芸術家と子どもたち、「NPO 法人芸術家と子どもたち HP」、<http://www.children-art.net/>（2011年7月31日最終確認）より引用。
- 16) 堤康彦、「アーティストと子どもたちの幸福な出会い』、『子どもたちの想像力を育む アート教育の思想と実践』、佐藤学・今井康雄編、東京大学出版会、2007年、pp.261-261より引用。
- 17) 四宮敏行、『学校が美術館 発想から実現までの記録』、美術出版社、2002年、p.31.より引用。
- 18) 「朝日のびのび教育賞 HP」
<http://www.asahi.com/shimbun/award/edu/rec2006.html#03>（2011年7月31日最終確認）より引用。
- 19) 神吉脩、竹井史、栗山誠、三嶋真人編著、『学校・地

域が元気になる！アートによるコミュニティ活動の実践』、明治図書、2006年、pp.98-99より引用。

20) ジョン・アーレン&リゴベルト・トレスの作品については、美術手帖1993年8月号、p.49.を参照。

21) 村上タカシ、「芸術表現教育における PBL (Project-Based Learning) の実践研究』、『宮城教育大学紀要』、第44号、2009年、p.107.から引用。

参考文献

- 上中良子、神吉脩、竹井史、山田康彦編著、『表現を生かした総合学習の展開』、明示図書、2000年
- 熊倉敬聡、『脱芸術／脱資本主義論-来るべきく幸福学>のために』、慶應義塾大学出版会、2002年
- 暮沢剛巳、『現代美術を知るクリティカル・ワーズ』、フィルムアート社、2004年
- 竹内博・長町充家・春日明夫・村田利裕編、『アート教育を学ぶ人のために』、世界思想社、2005年
- 谷口文保、『地域社会と関わるアートワークショップの実践研究 地域共創アートの誕生』、神戸芸術工科大学大学院、2008年
- 田野智子編、『ハート・アート・おかやま ニュースレター「HAO PRESS」第4号』、「HAO PRESS」編集部、2009年
- 堤康彦・坪井香保里・榎田優編、『2003年度エイジス活動記録集』、特定非営利活動法人芸術家と子どもたちエイジス事務局、2004年
- ドキュメント2000プロジェクト実行委員会、『社会とアートのえんむすび1996-2000 つなぎ手たちの実践』、トランスアート、2001年
- 橋本忠和、『市民教育における環境芸術の教材化の研究』、兵庫教育大学大学院、2010年
- 橋本敏子、『地域の力とアートエネルギー』、学陽書房、1997年
- 東山明、神吉脩、丹進編、『中学校・高校美術科ニューヒット教材集①絵画・平面造形編』、明治図書、2009年
- 兵庫県立龍野北高校総合デザイン科「兵庫県立龍野北高校総合デザイン科 HP」、
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~tatsunokita-hs/department/design/index.html>（2011年7月31日最終確認）
- 村上タカシ、「村上タカシ HP」、<http://murakamix.com/>（2011年7月31日最終確認）